

2023年2月12日 礼拝説教要旨

詩編講解説教137「忘却の彼方に」

詩編137：1～9、ルカ23：39～43

第137編は詩編の分類としては「嘆きの歌」に属します。この背景にもバビロニア捕囚がありますが、これは捕囚によって囚われの身になった詩人が遠く故郷を思いながら歌った歌であると考えられています。「バビロンの流れのほとりに座り、シオンを思って、わたしたちは泣いた」(1節) 遠く異教の地に連れて行かれ、川のほとりに一人座って、故郷を思って泣くのです。

さらに読み進めていきますと、この詩人の置かれている状況を伺い知ることができます。「豎琴は、ほとりの柳の木々に掛けた」(2節) どうもこの詩人は豎琴を奏でる人なのでしょう。でもその豎琴を柳の木に掛けたと言います。つまり弾くのをやめたのです。どうしてでしょう。「わたしたちを捕囚にした民が歌をうたえと言うから、わたしたちを嘲る民が、楽しもうとして、『歌って聞かせよ、シオンの歌を』と言うから」(3節) 支配する者たちがお前の国の歌を歌って聞かせよとふざけて言うのです。1節の「バビロンの流れ」というのは灌漑用の用水路のようなものだという解釈もあります。川から水を引くために捕囚民たちはそこで強制労働をさせられていたのかもしれない。その労働の合間に歌を歌ったのです。4節では「主のための歌」とありますから神殿で歌う礼拝の歌、賛美歌でしょうか。賛美歌を歌いながら遠くエルサレムを懐かしく思う。それは日々の労働で疲れ果てた捕囚民の心を癒したでしょう。でもその歌を嘲る者がおもしろがって聞くのが耐えられないのです。だから言うのです。「どうして歌うことができようか、主のための歌を、異郷の地で」(4節) それでこの詩人は豎琴を柳の木に掛けて、琴を弾くのをやめたのです。なんて悲しい歌でしょう。

しかし詩人は言います。「エルサレムよ、もしも、わたしがあなたを忘れるなら、わたしの右手はなえるがよい。わたしの舌は上顎にはり付くがよい。もしも、あなたを思わぬときがあるなら、もしも、エルサレムをわたしの最大の喜びとしないなら」(5～6節) これは一つの誓いのような表現ですが、ここには強い否定があります。右手は琴を弾く右手です。エルサレムを忘れるくらいならそれが萎えても構わない。舌は歌を歌う舌です。エルサレムを忘れるくらいならそれが上顎にはり付いても構わない。つまりそれくらい自分は片時も故郷を思わないことはないのだと詩人は言いたいのです。たとえ歌を歌わなくなっても決して故郷を忘れないという強い思いが込められています。それが読む人の心の琴線に触れるのです。

さらに悲しみが続きます。「主よ、覚えていてください。エドムの子らを、エルサレムのあの日を、彼らがこう言ったのを、『裸にせよ、裸にせよ、この都の基まで。』娘バビロンよ、破壊者よ、いかに幸いなことか、お前がわたしたちにした仕打ちをお前に仕返す者、お前の幼子を捕えて岩にたたきつける者は」(7～9節) ここでは捕囚の悲惨、破壊し尽くす残虐性が明らかにされています。それは親の目の前で子どもを取り上げて岩に叩きつけるというような悲惨な出来事です。そういう経験をした者は生涯これを忘れることはないでしょう。でも次の世代、その次の世代はどうでしょうか。人間は忘れるのです。だから戦争は繰り返されてしまいます。

「喉元過ぎれば」で時が経てば忘れてしまう。その証拠に今の戦争では各国は武器を供与していきます。日本も軍備を増強していきます。忘れていくのです。そこに人間の限界、罪の現実があります。

実際に捕囚民たちの中にも捕囚、離散の中で故郷を忘れてしまうという現実がありました。捕囚が解かれるまで50年の年月を要しました。半世紀というのは、忘れるには十分な年月だと思います。世代が変わるからです。捕囚を経験した子や孫の世代になる。もちろん忘れずに語り伝えた人々もいたでしょう。しかしその地に適応して、信仰を捨てていった人々も多くいたのです。当然です。言葉も文化も信仰も違う環境の中で生きていたからです。故郷の言葉を捨て、歌うことをやめ、礼拝をやめるなら、やがて忘れてしまうのです。この詩人が抱いている危機感は単に捕虜として連れて行かれた悲しみや強制労働の苦しみではなく、故郷を忘れ、信仰を失っていくことに対する危機感なのかもしれません。その悲しみがこの詩編には込められているように感じます。

けれども、これを乗り越えていくのが信仰です。今日の詩編で心に留めておきたいのは7節「主よ、覚えていてください」です。神さまがわたしたちの苦しみや悲慘を覚えていてくださる。御心に留めてくださる。今日はルカ福音書の主イエスの十字架のところを読みました。一人の犯罪人が「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言う。すると主イエスは「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（ルカ23：43）とおっしゃった。主はその一人の罪人を心に留めていてくださる。忘れない。そこにわたしたちの慰めがあります。

わたしたちも悩みや悲しみの尽きない人生です。この詩人のように故郷を離れ、家族は引き裂かれ、歌うことすらやめてしまう。そして誰にも覚えてもらえず、自分自身もすべてを忘れてしまうかもしれない。それこそ年老いて忘れてしまうことだってあるでしょう。そのようにして深い闇の中に葬り去られてしまう悲しみがあります。でも神さまは御心に留めてくださる。どうしてそれがわかるのか。そのために主イエスは低くわたしたちのところにきてくださいました。この悩み多き人生に寄り添い、そして人間のあらゆる悲しみ、痛みを担われ十字架で死んでくださいました。それはわたしたちを忘れないためです。そして主は三日目によみがえられて、「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と、悲しみの向こう側にある神の国を約束してくださいました。そのようにして忘却の彼方にも光を見させてくださいます。